武装

学園・工場「相互突入闘争」に起て！・・・・1
反政府実力闘争から革命的権力闘争へ・・・・5
工場占拠ゼネスト・二重権力・武装蜂起・・・19
志村化工「突入闘争」・・・・・・・・・・・・・・25
全逓戦線における
安保粉砕労働者行動委の闘い・・・・・・・・・30

青年共産同盟

3

学園・工場「相互突入闘争」に起て！

＝全共闘の再構築と「労学反乱共闘」創出のために＝

政府ブルジョアジーは「佐藤訪米ー日米共同声明ー一二月衆議院総選挙」といつた彼ら自身のスケジュールを強行におし切る中から七〇年安保へ向けた一大攻勢を開始しようとしてきている。彼らはこの一〇・一一月を街頭においては徹底した機動隊の暴力による実力制圧、その裏においては総選挙の形をとつた強引な政治操作、そしてブルジョアジー自身はすでに時代は直接行動の時代へと突入していることを知り過ぎるほど知つている。こうしたことに気付かないばかりか、現在まではブルジョアジーのお題目であつた議会制民主々義の幻想にかじりつき、すでに反動と化している日共・社民の犯罪性こそは今回の総選挙における惨敗と棄権率の一層の増大を見てみれば、人民大衆の方がそのようなことに敏感に反応を示している。

全国の闘う労働者学生諸君！

こうした権力の攻勢と、人民大衆の明かな二極分解、つまり体制内秩序派とすでに民主々義の破産に気付き議会主義から離反している多くの意識層！ こうした状況とそは階級闘争総体がまさに権力を問題とする闘争の時代に突入していることを示している。

× × ×

六九年階級闘争は一〇ー一一月闘争の総括をせまる中から新左翼諸潮流に対し最も根底的なところで旧態以然とした新左翼運動の破産を宣告していつた。それは同時に日本階級闘争の中に新しき闘争の時代を萌芽させていつたということなのだ。反政府実力闘争、政策阻止実力闘争の限界性をもはや観念的な言辞をもつて包み隠すことはできない。しかしながらこうした問題性と同時に限界をこえた真の権力闘争への途が六七年以降の全闘争過程の中にこそ示されていたのだつた。六八年日大・東大を頂点とする全国学園バリケード占拠闘争とその高揚を実体的基盤として闘われた一〇・八ー二一新宿反乱闘争の本質的意義とは、新左翼セクト諸派の諸君が提起したような外見的な問題性とはお

よそかけはなれていた。彼らの一部にあつては学園における占拠反乱の闘いに対し、「帝大解体」とか、「大学の帝国主義的再編」または「再編」を「改編」におきかえるといつたような空文的スローガンを付与することにより、学園占拠闘争の本質性から目を離すことに四苦八苦する状態であつた。また街頭における大衆の徹底した反乱闘争に対しても同様に「中央権力」とか「政府中枢」とかの言辞を与えることによつて、あるいは場所を官庁街に移すことによつてこれが権力闘争であるかのような幻想をバラまくことに終始していつた。

全国の闘う労働者学生諸君！

事態はすでに明白であろう。六九年の闘争全体がそうした六七ー六八年の闘いの延長をもつては闘いきれなかつたことが。そして事態はどのような状況にあり、われわれの直面している問題が何であるのか、こうした問題に対して答えきれなくなつているセクト諸派の限界こそは権力闘争に対する無知から来ているのではないか。しかしそれもまたやむをえない事ではある。何故なら日本の新左翼諸派は社共既成指導部に対する急進的反対派として成長し、その主要路線とは既成左翼の組合主義的、議会主義的な反政府・政策反対闘争に対して街頭における反政府・政策阻止実力闘争の形態を実践することにより自己を形成してきた潮流であつた。こうした実力闘争の形態は六八年初頭あたりまでは既成左翼に対してその無力性を暴露し、彼らのヘゲモニーをつきくずす上で大きな役割を果した。しかしながら六八年夏以降における闘いに入ると事態はもはやそこには留まりえなかつた。つまり六八年三月ドルー金兌換の停止をもつて表面化した戦後世界ドルーポンド体制の根底的動揺とフランス五月に象徴されるヨーロッパ階級闘争の激化は戦後世界体制の動揺と世界危機の一層の深化を意味していたのであり、こうした世界的背景のもとにブルジョア支配の根源にせまる学園占拠闘争と、そこから産み出された全共闘ー大衆行動委運動の深化拡大は右翼＝民青との内ゲバ、さらに国家権力との闘争を経る中で大衆武装を貫徹し、まさにソビエト運動の萌芽として成長していつたのだ。そしてこれこそがプロレタリア権力ー生産過程の中に直接に権力を構築することによつてブルジョア権力との武力対決をせまる二重権力闘争の原点なのであつた。さらにはこうした全国全共闘運動の深化拡大を通して闘われた一〇・二一新宿反乱闘争こそはブルジョア秩序の最も弱い部分であり、交通網の密集していることにより最も重要な地点である新宿の地において数十万の大衆の中へ権力を引き込み包囲分断しせん滅する都市人民戦争の初歩的形態でもあつた。

こうした職場・学園におけるバリケード占拠反乱と街頭での都市人民戦争形態での国家権力との実力対決の重層的

連続的展開こそは真の権力闘争の本質的戦術であつたのだ。

全国の革命的労働者学生諸君！

われわれは今こそ、ここに宣言する。旧来の実力抗議闘争の延長線上に権力闘争を設定する全ての潮流は破産せざるをえないと。

だがわれわれの前にはまだ多くの困難が途をふさいでいる。

すでに明かなように学園における闘争の激化と街頭闘争の巨大なうねりとは相互不可分なものであり、街頭における反乱を爆発させるには学園・職場における徹底した闘争のにつまりが必要であるし、学園・職場において闘争を徹底させるためには街頭における反乱闘争の爆発が必然的に問われてくる。こうした生産点と街頭の相互浸透性は逆に言うと片方が権力の弾圧にくずれると同時的にもう一方もその壁にぶつからざるをえないということなのだ。しかしながら、部隊結集の原点はやはり学園であり、職場であるし、部隊を保持しておくことのできるのも同様であるかぎり、この一〇ー一一月の打撃を回復するためには全国学園における全共闘の下からの再構築が第一義的に問われてくるのではないか。

現在全国全共闘は八派のひきまわしの中にその生命力を減退させられ、さらには革マルの右翼的介入をもつてまさに危機的状況におかれている。そして全共闘の組織的性格からいつて、それは反乱的大衆行動委組織と反乱的大衆との密接な相互止揚をもつて成り立つているのであり、いつたん学内が日常化され、反乱行動がなくなつてしまうとそれは恒常的組織とはなりえずに行動委レベルの活動家のみが残存する、いわばがい骨組織となつてしまうのである。だからといつて、ある諸君のいうように闘争の激化している時期は全共闘、闘争の下降局面では自治会といつたハレンチな戦術をとることはできない。何故ならば現在のように安保を前に激化する世界資本主義の根底的危機と世界階級闘争の激発する時代にそのような戦術をとることはまさに日和見主義であるし、闘争の下降局面でそのような戦術をとることは自らにして闘争を後退させ日常化させてしまう秩序派策動に他ならないからだ。

それでは、一〇ー一一月闘争を経た現在、全共闘を下から再構築するにはどのような闘争形態が要求されているのだろうか？

それこそは反乱の再燃焼であり、徹底した秩序破壊である。学園占拠闘争の本質的基盤とはやはり秩序に対する徹底した反乱であろうし、その延長こそがブルジョア秩序の根底たる「私有財産制秩序」「生産の私有化」に対する生産点占拠といつた形で表わされる生産点反乱なのである。しかしこうした反乱行為は当然のこととして官憲機動隊との正面対決を不可避とし、今われわれの直面している問題

もまさにその問題としてある。だが現在の全国学園における内部問題とはこうした権力との直接対決の前に反乱自体が眼り込まされているのであつて、そうした反乱自体を再燃させることなしには権力との対決も問題とはならない。われわれはこの春へ向けて学内を日常性の中に埋没させておくことをまさに致命的問題として受けとめなければならないだろう。

こうした状況を打ち破るためには各学園において学内を流動化させるための行動として校舎・教室への革命的突入闘争、授業粉砕の形をもつて行なわれなければならないだろう。各学園における個別問題を軸とし、授業の犯罪性を行動によつて粉砕し、教授を室外へたたき出す行為を日常的課題として貫徹し、学内の流動的制圧をもつて、学内秩序派＝教授会、右翼、民青、革マルとの徹底的実力闘争を貫徹する必要がある。こうした行動を通して、原則的なクラス、ゼミ、サークル等行動委を実体的に組織せよ！

さらにこうした各個学園の反乱激化を地区全体の反乱として打ち固めるためには、学園の相互突入闘争において学内流動の激化を促進し、学園地区共闘の創出と、職場における闘いへの主体的突入＝職場突入闘争（一〇・一三志村化工突入闘争の成果）→職場・工場ー学園相互突入闘争をもつて地区反乱を創出せしめよ！　こうした地区反乱の爆発こそが権力との直接対決にたえうる反乱闘争の環なのであり、全国全共闘の下からの再編、構築とはこうした意味において提起されねばならない。

反政府実力闘争から革命的権力闘争へ

秋の闘争総括と既成の新左翼運動からの訣別

一、一〇ー一一月闘争の総括

(1)　一一月決戦の性格

周知のように、一〇ー一一月決戦は、反乱戦線に対して政府ブルジョアジーが準備した。

すなわち、九月の愛知訪米を突破口にして一一月佐藤訪米・日米会談→七〇年安保堅持・沖縄返還メドで集約し、総選挙勝利→国会空洞化・七〇年代安保再編強化の強行という政府ブルジョアジーの基本政治路線の設定である。

しかも、そうした総選挙体制に、社会党共産党等の議会主義諸党派を引き込み、安保反乱戦線の孤立化を準備したのである。

また、他方、学園非常事態法強行採決を突破口に、それを背景とした学校当局、日本共産党＝民青、右翼秩序派と一体となつた相次ぐ学園バリケード破壊・全共闘学生の大量逮捕と長期拘留による闘争圧殺、学園機動隊駐留体制の常駐化。街頭制圧反乱に対する敷石撤去、機動隊パトロール体制の強化と日常化。中小企業職場・事務所占拠闘争に対する機動隊介入と大量逮捕等々の予防弾圧体制の貫徹と自衛隊の治安出動の準備、警察機動隊の増強をもつて、反乱戦線の先制攻撃を開始したのであつた。

事実、六七年砂川闘争を突破口にして、羽田闘争。六八年エンプラ、王子、成田闘争を中心とした街頭実力闘争を主軸に、全国実力基地撤去闘争の拡大を勝ち取つてきた戦闘的学生と反戦派労働者の闘いは、のみならず、政府ブルジョアジーの官僚執行権力独裁を背景とする安保・資本の攻撃に対する、学園占拠バリスト闘争、中小企業職場占拠闘争として発展していつたのである。六八中大学費闘争と、日大・東大・学園占拠バリケードストライキ闘争がそれであつた。

しかも、こうした学園占拠と、街頭制圧戦によるブルジョア国家権力＝機動隊の弾圧体制の麻ひを通して、全国学

園占拠反乱の爆発を勝ち取り、ブルジョア学園秩序ーブルジョア支配秩序の一角ーを恐慌状態に落しこめたのである。六八年一〇・二一新宿闘争ー米タン阻止を直接の契機とする戦闘的労働者・学生による新宿駅占拠・地区制圧戦がそれであつた。

さらには、中小企業労働者の職場・事務所占拠闘争や、大手企業労働者の社民・日共組合官僚に対する、内部反乱・反官僚闘争の波及を勝ち取つてきた。しかも、労働者の職制・組合官僚に対する内部反乱・内部階級闘争は、工場反乱の突破口なのである。

こうした、学園総占拠、工場・職場占拠の開始、街頭占拠制圧闘争の発展ー反乱戦線の発展ーに対して、帝国主義ブルジョアジーは、六九年一月東大安田講堂封鎖解除、四・二八沖縄闘争の全国戒厳体制、全都拠点学園バリスト破壊、大量逮捕を突破口に、広島大、京都大、全国学園占拠バリスト破壊攻撃、街頭反乱の徹底弾圧体制を貫徹し、一気に巻き返しを、推進してきたのである。

(2) 反乱戦線の任務は何か

われわれー反乱戦線ーの任務は、極めて明白である。先に見たように、六八年中大学費闘争・日大東大全国学園占拠闘争への発展が、街頭における大衆的反乱戦と戦闘部隊との結合した力によつて、機動隊の弾圧体制を麻ひさせ、その無力性を暴露したことによつて勝ち取られたことを教訓化するならば、また、

フランス五月反乱において、青年労働者・学生の力による一週間余のラテン区制圧によつて、巨大な工場・学園占拠ゼネストが勝ち取られたことを教訓化するならば、

われわれの一〇ー一一月闘争の任務は、文字通り、個別学園占拠バリストを破壊するブルジョア国家権力＝機動隊の治安弾圧体制を、反乱戦線ー高校生、大学生、労働者戦線ーの総力を結集し、打ち破る以外にはありえない。

すなわち、一〇・二一新宿都市反乱、都市人民戦争を突破口に、一〇ー一一月全都・全国人民戦争を展開すること。こうして、学園再占拠バリスト・工場、職場占拠闘争の発展を勝ち取り、佐藤訪米粉砕・安保粉砕の労学占拠ゼネストの展望を切り開くこと。

しかも、帝国主義ブルジョアジーが、先制攻撃をかけてきたが故に、一〇・二一新宿都市反乱がー都市人民戦争戦術の貫徹が、必須条件でありー最大の闘いとしてあつたのだ。

さらに付け加えるならば、四・二八闘争で街頭単純突撃闘争が、増強される機動隊の力の前に行きづまりを呈している現在、都市反乱・都市人民戦争路線による新たな街頭闘争の展開が要求されていたのである。

たしかに、六七年以降、羽田・エンプラ、王子、成田、国会等の突撃闘争では、機動隊への組織された実力部隊の

突撃と、大衆的包囲で、階級闘争の発展ー実力闘争の全社会的発展と学園実力占拠闘争の発展ーを保証しえたし、機動隊の包囲弾圧体制に対する抵抗力、反撃力を持ちえたのである。

しかも、こうした街頭闘争の発展と行きづまりの中でわれわれが教訓化しなければならないのが、都市人民戦争戦術による都市反乱ー駅占拠・交通線の分断と破壊ーの新たな街頭闘争の追求である。

すなわち、都市反乱・都市人民戦争とは、新宿のような平時でも半ば秩序が麻ひし、交通線の密集した地点での、大衆闘争ー大衆的街頭制圧戦ー　遊撃隊と実力部隊との結合による大衆的反乱の展開ー駅占拠・交通線の分断と破壊ーであり、しかも、実力部隊・遊撃隊の任務は、ブルジョア国家権力＝機動隊の弱点ーブルジョア官僚常備軍としての弱点を攻撃し、大衆のうずの中に機動隊を引き込み、大衆戦に依拠し、包囲、分断、撃破し、敵権力の包囲弾圧体制を麻ひさせ、大衆的反乱戦を拡大し領導していくことにある。

こうした、都市反乱・都市人民戦争の大衆的展開は、六八年一〇・二一新宿闘争で自然発生的に登場した。万余の労働者・学生による新宿東口広場の大衆的制圧戦を基軸にして、ML、中核等の党派軍団（遊撃隊＝実力部隊の役割を果したにすぎない）が、駅突入、機動隊との遊撃戦を展開し、大衆的反乱戦の大規模な展開を勝ち取り、しかもその大衆的反乱線は、駅占拠・地区占拠へと拡大し、連日闘争をも可能ならしめる状況を作り出したのである。

さらに、六九年四・二八闘争の有楽町→東京駅一帯の街頭制圧戦の展開。

六・二八全逓反合闘争を直接の契機として、新宿西口一帯の対機動隊との大衆的反乱戦の展開。

七・一九新宿東口反乱、八・二三新宿歌舞伎町バリケード闘争等々の一連の〝新宿土曜ショー〟の闘いは、都市反乱・都市人民戦争路線の展開の可能性を示していたのである。

しかもこうした都市人民戦争路線は、東大・安田闘争や広島大等々の玉砕・防衛主義をのりこえるべき闘いとしても提起されたのだ!!

九・二〇の京都大学の闘争がそれである。

その特長は、学園バリケード戦と街頭バリケード戦の結合、それによる機動隊への大衆的反撃であり、しかも、パルチザン戦がこうした大衆的反撃戦と結合し、二日間に渡る機動隊との攻防戦を展開したのであつた。それだけではない。九・三〇日大奪還闘争は、日大・明大〝中大を先頭とする全都の闘う学生の大衆的反乱戦ーバリケード戦、装甲車パトカーの焼き打ち戦、火炎ビンの大量投下ーの爆発として闘われ、しかも、党派軍団が大衆的反乱戦と結合し、

隨所で機動隊の孤立部隊を粉砕し、その包囲弾圧体制を麻ひさせたのである。

最早一〇ー一一月闘争のわれわれの任務は、明白であつた。都市反乱・都市人民戦争の爆発で佐藤訪米ー日米会談→総選挙という帝国主義ブルジョアジーの政治的プログラムを粉砕することであつた。

したがつて新左翼諸派の党派軍団（正規軍という位置づけ自身誤りである）の単純突撃闘争と大量逮捕ショーの無力性は、火を見るよりも明かであつた。

(3) 一〇・二一新宿都市反乱・人民戦争の不発と一一月闘争の敗北ー新左翼運動の破産宣言ー

先に見たように、一一月決戦が帝国主義ブルジョアジーからの先制攻撃が特長であるが故に、一〇・二一は文字通り事実上の決戦であつた。帝国主義ブルジョアジーは、反乱戦線とりわけ全共闘に対する出撃拠点つぶし攻撃、新宿クリーンアウト作戦等の都市密集点から一般大衆・交通を排除する〔全都ロックアウト攻撃〕を特長としており、それを通して戦闘部隊の意識大衆からの孤立化、各個撃破を準備したのであつた。

こうした機動隊・敵権力の対応に対して、結論からいつて、反乱戦線（それを領導すべき戦闘部隊＝新左翼諸派の党派軍団）は、明確な反乱の目的意識性（反乱戦術＝人民戦争戦術）を持つていなかつたのである。

くり返し強調すれば一一月決戦では、①機動隊の無力性の大衆的暴露②それを通して、反乱戦線の再構築と拡大と③佐藤訪米ー日米会談→総選挙を粉砕することにあつたのであり④そうした闘いは、最早、反政府突撃闘争では限界であり、人民戦争戦術を駆使し、駅占拠・交通線分断を戦略目標とする新宿都市反乱以外ありえないのであつた。事実反乱戦線の指導部隊戦闘部隊は、一〇・二一においても新宿から〔首相官邸占拠〕〔中央政府制圧〕〔中央権力解体〕等々と叫び、大衆戦との目的意識的な結合を目指すどころか、敵権力の弾圧網に対して、単純突撃をくり返し、戦闘部隊の大量逮捕で終つたのであつた。

しかも、このように機動隊による戦闘部隊の各個撃破によつて一〇・二一が終つたということは、また、解散地点でベ平連が示したような反乱エネルギーは、不完全燃焼のまま、機動隊の〔全都ロックアウト〕体制の前に、封じ込められ、反乱の爆発を引きのばされたことを意味するに過ぎなかつた。

さらに、新左翼諸派は、一一月闘争に、こうした一〇・二一闘争に問われたことー①戦闘部隊（新左翼諸派の軍団）と大衆反乱戦の結合②戦闘部隊の領導による大衆反乱戦の機動隊包囲網の分断と麻ひ③大衆的反乱戦線の拡大による駅占拠・交通線分断→ブルジョア秩序の麻ひーを追求する任務を放棄し、現地闘争へ反乱大衆を引き回したのである。

すなわち、七〇年安保闘争が切り開いた地平ー学園占拠＝全共闘権力の構築と工場職場占拠内部反乱の開始＝ソビエト運動の開始ーを政府に対する反政府街頭実力抗議カンパニア闘争にすりかえたのであつた。

事実一一月一六日の羽田・蒲田の現地闘争は、機動隊の総力をかけた弾圧網に対する党派軍団の単純進撃であり、反乱戦線の戦闘部隊と反乱大衆のいけにえであつた。これは、四・二八以降の新左翼諸派の街頭闘争ー反政府実力闘争とそれが意味する党派軍団単純突撃闘争ーの大規模な再現であつたし、また、急進的な反政府街頭闘争の行きづまりであり、社共に変つて日本階級闘争の発展を切り開いてきた急進左翼＝新左翼の時代＝六五ー六九の一歴史時代が終了したことを、宣言したことに他ならない。

では、一体新左翼諸派が切り開いた運動とは何だつたのか、また、何にかわられるのか、われわれは次章で新左翼運動により立ちもどつて明らかにし、さらにその次の章でかわるべき運動を明かにしたい。

二、階級闘争の発展と新左翼運動の歴史的限界

すでに確認してきたように、昨秋の闘争において新左翼運動のこれまでの路線は、帝国主義支配階級の「決戦」攻撃の前に、事実上、敗北を喫したのであつた。

われわれは、それに代り自らを新たに権力闘争の時代に突入した階級闘争の指導部としてきたえ上げていくためにも、新左翼運動総体をさらに歴史的に、また、内在的に総括する作業を進める必要があるだろう。

(1) 新左翼運動の位置

これまでの新左翼運動が階級闘争の中で客観的に占めてきた位置は、反政府実力カンパニア闘争の指導部であつた。

それは、日本の階級闘争が基本的には戦後民主々義体制とそれを支える組合主義的労働運動の枠の中に包摂され、その動揺の過程において登場した実力カンパニア闘争が一つの社会的勢力として確立されていく段階にあつては、一定の積極的役割を果した。

だが、こうした既成左翼の議会カンパニアの「実力版」としての反政府闘争に対して、六八年にその中から登場した、学園占拠闘争と一〇・二一新宿型のいわば反乱闘争は新左翼各派の「急進左翼」あるいは「観念的思想左翼」としての限界を暴露させた。

そして、それら実力カンパニア闘争時代の所産である新左翼運動が歴史的限界に直面し、逆に反乱闘争ー権力闘争の発展に対するセクト的障害物に転落してしまつているのが現状である。

そこで、われわれは、彼らの「急進左翼」「観念左翼」

としての限界をその形成発展過程にさかのぼつて検討してみることを必要とするだろう。

(2) 新左翼運動の展開過程

新左翼運動に「観念左翼」の路線を最初に烙印したのは六一年の「全学連第一七会大会」に象徴された革共同学生運動であつた。

彼らは、次のように六〇年安保を総括することから出発した。

「あの〝はなやかな〟しかも〝偉大だつた〟安保闘争が全学連内部の革命的潮流を強化するのではなく、日和見主義的なスターリニスト全自連の潮流を結局は強化してしまつているというまぎれもない現実を直視」し、「安保全学連が小ブル急進主義学生運動でしかなく、その指導部であつた旧共産同は小ブル民主々義をふりまく左翼スターリニズムの組織でしかなかつた」（第一七回大会議案「総括」）

この総括は、五〇年代後半から六〇年にかけて展開された現実の階級闘争の歴史的段階と、そこにおける革命的左翼の社民・日共指導部との党派闘争とその既成指導部の下にあるプロレタリアートに対する統一戦線戦術という、一言でいえば、戦略戦術論上の総括を一切捨象したものであつた。したがつて、そこから産み出されたものは、階級闘争のダイナミズムからの驚くべき隔絶であり、反スターリニズムの思想運動と、「組織のための闘い」と称する「党組織戦術と大衆組織戦術の二重写し」と前者への「物神崇拝」そのものであつた。それは、旧共産同が闘いとつてきた戦闘性を新左翼運動の中から著しく減退させ、新左翼を社民・日共に対する観念的左翼反対派へと転落させる結果をもたらした。

こうした革共同学生運動を規定していた要因の一つは、確かに六〇年安保闘争直後の階級情勢であつただろう。池田低姿勢ー高度成長政策内閣と江田改良主義社会党路線によつて象徴される戦後民主々義体制のいわばらん熟期であつた。それゆえ、新左翼運動が実践的にかかわるのに困難な客観的条件をもつていたことは事実であり、「一七回大会」路線がある程度その反映物であつたことも事実であろう。

だが、革共同路線を規定していたもう一つの要因は、いうまでもなく黒田寛一をはじめとする主体性哲学・疎外革命論という彼らの「革命理論」そのものであつた。「主体性哲学」は、すでに戦後まもなく、日本共産党の「政治主義」に対する「人間主義的」批判を行う哲学者グループとして潮流を形成してきていた。また、「疎外革命論」は、資本主義社会を、原始共同体崩壊後の社会全般と「疎外社会」として同質に把え、したがつてまた、労働一般を「奴隷制労働・農奴制労働・賃金労働」という「疎外された労働の三形態」として同質に把握している。この理論は、資

労働者階級が歴史的特質として階級社会そのものを止揚する世界的任務をもつことが、完全に不明確であり、現実の階級関係の科学的分析の方法論たりえないものでしかない。

こうして黒田理論の観念性にも規定されて革共同学生運動は、観念左翼・思想的反対派の路線を歩んだ。それは、現実の階級闘争については、せいぜい社民反対派としての徹底した改良主義路線を意味し、そこから「組織」が彼らの「思想的立場」に立つものを一本づりすることをもつて戦術とする路線を意味していたのだ。

だが、こうした革共同全学連運動も、六二年に入り大管法闘争が起きたことをきつかけに分解し、より「純化された」革マル派と「実践化した」中核派とに分裂した。

しかし、この革共同路線そのものは、その後も新左翼運動に「観念左翼」としての影響を根強く与えていつた。

新左翼運動の次の段階は、六三ー六五年にかけての戦闘的全学連運動の再建期であつた。

六三年秋の東大教養授業放棄闘争をもつて開始された日韓会談粉砕闘争、六四年九ー一一月の原潜阻止横須賀闘争、さらに六五年の日韓条約批准阻止闘争へと展開された二年間の闘いは、学生戦線における戦闘的全学連運動の後退と民青系運動の伸長という六一ー六二年段階の低迷を大きく転換させていつた。

実際、原潜闘争における八校連絡会議の形成から、日韓闘争をとおした都学連、全学連の組織的再建は、首都を中心とした学生運動の再建を反映するものであつた。

だが、日韓条約をめぐる闘争は、日本階級闘争全体にとつても重要な転換点をなすものであつたのだ。すなわち、日本帝国主義は、六三年夏のアメリカの利子平衡税による経済不況とヨーロッパ諸国の政治的経済的な階級対立の激化、および、ベトナム革命戦争の開始によるアジア支配体制の動揺という事態につき動かされ、執行権力独裁への移行を開始したのである。それは、支配階級が、流動化するアジアへの介入の第一歩をふみ出したのと同時に、国内戦後民主々義体制に対する再編成に着手したことを意味した。

これによつて、今日みられる社会党ー総評の組合主義労働運動と議会圧力カンパニアの総破綻が、ここに端緒的に開始されたのであつた。

それゆえ、新左翼指導部にとつて問われたのは、再建された全学連運動と登場した反戦青年委員会運動に対して、社会党・日本共産党の運動の内部における反対派の地位から、全く独自の闘争部隊の指導部を確立するために、独自の階級闘争に対する基本的展望ー戦略が要求されたことであつた。

全学連再建を主要に担つたのは、共産同のマル戦派と統

一派、そして、革共同中核派、社青同解放派などであつたが、この時期闘われた党派闘争の主な論点の一つは、戦略をめぐるものであつた。その意味では旧マル戦派が、まず「帝国主義の死闘を内乱へ」というスローガンを提起し、次いで世界危機論を提出して戦略論争を引き起したことは、それ自身が権力問題、軍事問題、党組織論などの諸点を欠いだ不十分なものであつたとしても、中核派に代表された諸派の観念左翼理論の残滓との論争であり、積極的意義をもつていただろう。

だが、新左翼運動は、さらに六七年以降の階級闘争の飛躍の中で新たな問題に直面した。

六七年に入り、全学連・反戦の闘いは、強化された執行権力の基地安保攻撃に対する反撃闘争として開始された。

六七年春の砂川基地闘争と秋の二度にわたる羽田闘争は、日韓以来無力化を露呈した社共の国会カンパニア運動に対して、実力政策阻止闘争を対置して、それにべ平連やその他の自立した闘争諸団体を結集させるものとして展開されたであろう。

以降、エンプラ阻止佐世保闘争ー王子野戦病院闘争ー成田国際空港闘争と続く一連の実力基地闘争において、全学連と反戦青年委員会の闘争部隊による機動隊との対峙ー衝突、それによる社会的影響力の拡大という闘争形態が定着

そしてそれは、従来の戦闘的自治会運動に代る新たな大衆闘争組織として全共闘を産み出し、全共闘運動を形成したのであつた。全共闘は、一人一票の代議制自治会とは異質の、先進的大衆の決議執行機関であり、大衆武装組織であつた。こうして、もはや単なる「教育学園闘争」ではない、学生の大衆反乱闘争が構築されたのだ。

第三の特徴点は、街頭実力行動の変質であつた。すでに成田闘争においても部分的に露呈した闘争部隊の単純突撃闘争の破綻に対して、学園占拠闘争を基礎にした都市反乱闘争としての一〇・二一新宿闘争が登場したのである。それは、もはや佐世保や王子闘争の規模をはるかにこえた文字通りの大衆的反乱であつただろう。数万のプロレタリア大衆による街頭制圧・駅占拠・交通線の分断という闘いは、一万余の敵権力をたちまち無力に落入れた。従つて、その連続的展開の貫徹は、工場占拠・職場占拠への波及の可能性をもつたものであつた。そして、組織された実力部隊と先進的大衆闘争部隊との結合および都市に密集するプロレタリア大衆の闘争への参加という新しい闘争主体の編成がはじめて問題となつたのだ。

以上、六八年階級闘争は、六七年羽田で切り開かれた闘いから、学園占拠という、いわば工場・職場占拠ゼネストと同質的な闘争形態ープロレタリア自己権力闘争の原点ー化していつた。

だが、六八年に闘われた、こうした一連の闘いの展開は同時に新たな質的変化を産み出した。

第一は、特に佐世保ー王子闘争において全学連・反戦の闘争部隊が一定程度の連続闘争を貫徹することによつて、単に意識的・先進的大衆部隊のみならず、地域のプロレタリア大衆をも闘争に参加させ、いわゆる「群衆戦」型の闘争形態の萌芽が登場してきたことである。

第二は、羽田闘争ーエンプラ闘争をとおして、まず中大学費闘争が、大衆的学園占拠闘争への端緒を示し、続いて、日大ー東大闘争を両軸とする全国的な学園占拠バリケード闘争が開始されたことである。

従来から学園闘争は、六四年の慶応学費闘争にはじまつて、早稲田・明治と毎年連続して闘争が組まれてきていた。それは、戦後支配体制の再編成に伴う帝国主義の教育学園攻撃と、それに対するぼう大なプロレタリア予備軍に転化した学生大衆の反撃として、また、大学そのものが、ブルジョア秩序の弱い環であることから、それは長期ストライキ闘争として、闘われてきたものであつた。

六七年羽田闘争における実力闘争部隊の社会的登場と権力に対し与えた一定の打撃をきつかけにして、それが具体的に学園闘争に波及し、バリケードの構築と右翼・民青との衝突とその粉砕、大衆的占拠闘争へと発展したのである。に突入し、さらに、都市大衆反乱としての街頭行動をひき起した。すなわち、新たな闘争形態と統一戦線戦術とが要求されはじめたのである。

だが、実際には、六九年一月の東大決戦において、新左翼運動は単純なバリケード防衛・籠城主義に陥り、全面的な敵権力による学園秩序がそれを突破口にして全国に貫徹された。

また、すでに先にも確認したように、従来の街頭闘争の単純延長に「中央権力闘争」や「政府中枢制圧」といつたスローガンを冠しただけの闘争のくりかえしが、四・二八闘争の敗北として現出したのであつた。そして、一一月闘争においても、わずかに新宿闘争において、群衆戦型の闘いが展開されたにとどまり、主力のおもむいた蒲田ー羽田闘争は重大な敗北を再び重ねる結果をもたらした。従つてまた全共闘組織も、一一月闘争から全面的な学園再占拠闘争に突入できず、その大衆闘争組織としての性格を一層失うこととなつた。

こうして、既成の新左翼運動の歴史的限界が、階級闘争の展開をとおし事実によつて明かにされてきたのである。

(3) 権力闘争と新左翼諸派

以上、見てきた展開過程の中で、再び新左翼運動の根本的な飛躍が要求されてきている。

かつて、戦略問題を提起した旧マル戦派もその戦略戦術論における権力問題の欠如から六九年以降急直下に新たな段階に突入した階級闘争に対応する新たな戦略戦術論を提起しえず、第七回大会で敗北し、分解した。

またそれに対して、関西ー統一派も、「具体化された国際主義」「組織された暴力」などをもつて活動家大衆を結集したが、現実の中央権力闘争が敗北することをとおして分解をはじめた。

今日、このブンド各派のみならず、新左翼諸派は一様に中央権力闘争の行きづまりから、軍事を中心とした政治路線とか、軍団の強化、共産主義者の突撃隊の組織化等を語つている。

だが、最も核心的に問われている、権力闘争の主体ープロレタリア大衆武装とその組織ーにかかわつた共産主義者の目的意識的武装についてはほとんど答えられてはいない。それは、戦略・戦術綱領とその軍事綱領の確定として答えられなければならないのだ。それなくしては、死活的意義をもつ軍事問題も、中核派に見られるように「肉弾の思想」といつた類の精神主義に解消されてしまうだろう。

また、革共同中核派は、最近の前進紙上における総括論文の中で、依然として「労農同盟」と「社民との統一戦線論」を主張している。階級同盟とは、革命の戦略配置における階級の配置を意味するのであろうが、一体、中核派の諸君は、日本における農民と、かつてのロシアの貧農、あるいはアジア後進諸国の農民との質的な区別をつけてこれを提起したのであろうか。（一言だけ言えば、日本における「農民」と称せられる層の大部分は、実際上半ば都市の工業に吸収された半プロレタリアートであること、それを除いた層はまさに富農であつて、プロレタリア権力の内的一翼を形成するものではないこと。また、かつてのロシアや現在の後進国の農民は、圧倒的多数が主要な生産手段である土地をもたず、自らの再生産のために自己の大部分の生産物を費し、剰余は商人資本によつて収奪されているような貧農層であつて、彼らは土地の武力解放と生産の社会主義的組織化を進める農村解放区（コンミューン権力）を担い、プロレタリア世界革命の一翼を構成しうるであろうし、現に一部ではそれを開始している。）

また、彼らの「統一戦線」については論外であつて、「反乱部分を孤立させないために、社民と統一戦線を組む必要がある」というのは全く誤りで、現実には社民官僚に粉砕されるか、社民の後押しへと反乱大衆をおしとどめてしまうのがオチである。

われわれに要求されているのは、「統一戦線戦術」であつて、社民官僚との「統一戦線」では決してない。しかも、権力闘争の時代における主要な統一戦線戦術は、フランス五月や全共闘運動に見るように、先進的部分の行動による

直接プロレタリア学生大衆との対決と革命的大衆の行動への結集であり、社民官僚との闘争はむしろ不可避であつて、それはまた、プロレタリアートの遅れた部分とのプロレタリア内部における階級闘争としても行われなければならないのだ。

こうして、最も基礎的な戦略戦術上の諸点において根本的な欠陥をもつ以上、新左翼各派の急進左翼と俗流観念左翼への分解や、両者へのジグザグはまた避けられない。われわれは、真の権力闘争の前衛として、戦略綱領・戦術綱領と軍事綱領、そして、党組織綱領とを提起しつつ、諸闘争をそれに基づき組織していく任務を果さなければならないだろう。

三、反政府実力闘争から、革命的権力闘争へ

以上見たように、新左翼運動が、その歴史的一時代を終了した。われわれは、まずかわるべき新たな運動として文字通りブルジョア支配の打倒＝プロレタリア・ソビエト権力の樹立を直接の目的とする革命的権力闘争＝ソビエト運動を宣言したい。（武装二号参照）

(1) 階級闘争の現局面ー戦後帝国主義の世界危機の開始と日本階級闘争の現局面

われわれは、戦後帝国主義の世界危機の開始を六八年に相次いで起きた二つの事実によつて明確に把えることができた。

第一は、六八年三月一七日のロンドン自由金市場における金売却の停止ー事実上のドル・金兌換の停止であり、それは、戦後帝国主義の経済的世界体制を担つてきたドル・ポンド国際通価体制が崩壊を開始したことを意味していた。

第二に六八年五月に起きた、フランス五月反乱であり、フランス一〇〇〇万プロレタリアートと学生大衆による工場占拠・学園占拠ゼネストであつた。それは、帝国主義国内部において階級闘争が、ブルジョア執行権力独裁とプロレタリア大衆反乱との死闘の段階に入つたことを告げ、戦後帝国主義の政治的世界危機が端緒的に開始されたという普遍的性格を示したのである。

しかも、こうした二つの事実は、それらの事実が鋭く示しているように、戦後帝国主義の世界危機ープロレタリア革命かブルジョア反革命かの世界的な激動期が開始されたことを示している。

実際、三月以降、各国通貨は、ポンド、フランと次々に危機に陥り、しかも、フランス五月反乱を突破口としたイギリス、ドイツ、イタリア等のプロレタリア・学生の抵抗と反撃は、激化し、タブーとされていたポンド、フランの切り下げとマルク切り上げ実施という為替レートの調整へと追い込まれ、為替戦争による帝国主義対立の激化と、自

国帝国主義の防衛（ブルジョア支配の維持）へと至つている。そして、現在、国際的ヨーロッパ階級闘争の事態の展開に規定されている―圧力という形で再びアメリカと日本をヨーロッパの泥沼的事態に引きづり込もうとしているのである。

こうした世界危機の開始の中で日本帝国主義もまた、国内労働者・学生への全面的な〃搾取と収奪〃〃侵略と抑圧〃の攻撃を強化し、闘う労働者・学生の抵抗と反撃に遭遇し、戦後民主々義を背後に、官僚執行権力独裁を前面に突き出してきたのである。

実際、日本帝国主義は、六三年ケネディの利子平衡税の引き上げによるアメリカのドル防衛強化を背景とする国際圧力の前に六四―六五年の不況に直面し、高度成長政策は動揺したのである。

しかも日本帝国主義は、①こうした国際的不況圧力に対して、高度成長政策の維持のため財政からのテコ入れと、ドル資金の供給とドル市場とりわけアメリカ国内市場への強行輸出しか打つ手はなく、②政治的には、七〇年安保の内実としてアメリカのアジア反共軍事支配体制の行き詰りベトナムの敗走を、日米安保再編強化し、補強することが必要不可欠なのである。③このことは、六〇年安保の双務化・実質化が問われているのであり、アメリカのアジア政策（ベトナム侵略戦争）の積極的加担と、米兵の肩代りとしての自衛隊・防衛力の強化が突付けられているのであり④そうした七〇年安保再編強化の一環としての沖縄返還策動が開始されたのだ。

それればかりではない。

先に見たように戦後帝国主義の経済的世界体制が崩壊し、ヨーロッパ帝国主義国内部のプロレタリア学生大衆の抵抗と反乱の前に、ポンド、フランの切り下げ、マルクの切り上げに至つた現在、戦後帝国主義の経済的危機の国際的圧力が、アメリカ、日本をおそい始めたのであり、こうした中で、日本帝国主義は、ドル圏への従つてアメリカ帝国主義に対する経済的依存を、増々強めざるをえない。このことはまた、七〇年安保攻撃が、日本帝国主義の労働者・学生に対する帝国主義支配の延命の環であり突破口であり、しかも現在、総選挙に勝利したということは、七〇年代安保再編強化、資本の全面攻勢の序曲であり、その警鐘に他ならない。

実際、六五年日韓を突破口に、六七年砂川、全国基地拡張近代化攻撃、南ベトナム・東南アジア訪問、佐藤訪米、六八年エンプラ寄港、王子成田、米軍タンク車の急増、六九年大学法、一一月佐藤訪米等々と七〇年安保攻撃を〔安保繁栄論〕〔大国日本・自主防衛〕を大衆結集スローガンとして、官僚執行権力の強化を背景に推進していつたのである。

しかも一方では、六七年健保改悪の強行採決。公共料金を主導とする諸物価の値上げ攻勢。全逓、国労、動労等の大手公共企業労働者への合理化攻勢、大手民間企業の合併、合理化攻勢。中小企業の合理化、さらに労働強化、賃金凍結攻勢等。また学園では、学費値上げ攻勢、教育の再編等の攻撃が開始され、強化されてきたのである。

従つて七〇年、七〇年代日米安保は、戦後日本帝国主義のブルジョア支配の本質問題であり、激化する日本帝国主義の攻撃の性格から安保階級闘争として、日本プロレタリア学生にプロレタリア革命とアジア革命の前衛としての登場の日程を直接的に提起し始めたのである。

(2) ソビエト権力の樹立―闘う労働者・学生に何が問われているか―

周知のように六八年五月フランス一千万プロレタリアートは、フランス資本主義防衛のための、財政収奪、合理化、賃金統制を強行するドゴールブルジョア官僚執行権力独裁に対する抵抗と反撃の工場・学園占拠ゼネストに起ち上つたのである。それは、五月一〇日のラテン区の青年労働者学生の地区占拠制圧戦―フランス治安警察力への徹底抗戦の貫徹―を突破口として、ルノー等を先頭とする青年労働者の下からの工場行動委員会の組織化と工場占拠行動。それへの全国的波及、ゼネストの実現としてあつた。

こうしたフランスの労働者・学生の闘いの特徴は、工場・学園の占拠であり、占拠行動のための闘う行動委員会（組合とは別の）の組織の登場であつた。

また、日本でも、七〇年安保闘争の過程で、六八年中大学費闘争を始めに、日大・東大で学園占拠が闘いの方針であり、占拠を闘う組織として全共闘が形成された。また、学園占拠＝全共闘の登場は、六八年一〇・二一新宿闘争―戦闘部隊と反乱大衆の結合による大衆反乱戦の拡大によつてブルジョア国家権力＝機動隊の治安弾圧体制の分断と麻ひをとおして、駅占拠・地区制圧―の爆発を合図に、全国学園総占拠への発展と、労働者の工場・職場占拠闘争の開始＝ソビエト運動の開始を勝ち取つて行つた朝日無線労働者・日本雑誌等出版労働者・大阪中電の事務所・職場占拠闘争・反職制組合官僚内部反乱闘争の発展がそれである。

こうした新たな闘争＝占拠反乱の意義は、

①ブルジョア支配の原点をなす工場職場のブルジョア秩序を麻ひさせ、ブルジョア支配を麻ひさせ従づて、ブルジョア国家権力を動揺させること。②占拠を貫徹するもの―闘う労働者・学生―の自己秩序の出発点であり、闘う労働者・学生の秩序の原点であり、闘う労働者・学生権力の基礎である。③しかも、こうしたブルジョア工場学園秩序の否定は、ブルジョア秩序派（社民・組合指導部・日共＝民青等）やブルジョア国家権力との不断の闘いの貫徹を必要とする。

従つてわれわれは、こうした占拠闘争とその担い手＝フランス五月＝工場行動委員会、日本＝全共闘・行動委員会は、二重権力の創出＝ソビエト運動の原点であり、こうしたソビエト権力ープロレタリアートによる資本の原点＝直接生産過程の奪取と、直接武装組織ーの出発点にほかならないことを確認しなければならない。

さらに組合員の一人一票による組合運動（＝自治会運動）について、言及するならば、それは、ブルジョア工場秩序を認めた上での組合員の生活と権利を守り、勝ち取るだけであり、労働力商品化を前提＝ブルジョア工場秩序を前提とした体制内的運動でしかありえないし、また組合とは、そうした運動の組織以外の何ものでもなく、従つてそれは、占拠反乱のブルジョア工場秩序を粉砕する革命的闘いにとつては、新たな組織＝全共闘・工場委員会等闘う労働者・学生の組織には、反動的阻害物として立ち現れるのである。

そもそも、ロシア・プロレタリアのソビエト革命が明かにしたように、ブルジョア支配を打倒することとは、近代プロレタリアートをプロレタリアートたらしめている資本の生産過程の直接的抵抗を出発点として、武装し、プロレタリアート＝生産主体の生産手段の奪取と、その基礎を喪失したブルジョア権力を打倒することなのである。

また、そうした全社会的ソビエトー生産過程を基礎にしたプロレタリアートの武装組織ーの創出＝二重権力の創出なくして、歴史的に最強のブルジョア権力＝中央集権的官僚執行権力ー全国的に組織された官僚・警察・軍隊ーを打ち砕くことはできない。

われわれは、従つてこう宣言しなければならない。戦後帝国主義の危機が開始ーブルジョア官僚執行権力独裁とプロレタリア学生大衆の反乱の開始ーされ、このプロレタリア学生大衆の反乱を、学園工場内部反乱や工場・職場・学園占拠を通して、ソビエト運動ー工場全共闘・学園全共闘ーとして組織化し、プロレタリア学生のソビエト権力の樹立の闘いとしていかなければならない、と。

また、すでにフランス五月闘争や、日本の全共闘運動が、ソビエト運動を開始したのだ、と。

(3) 権力闘争の具体的任務

われわれは、学園占拠闘争と工場内部反乱・工場占拠闘争が、従つてその担い手＝全共闘と工場内部の行動委員会がソビエト運動ー全社会的ソビエト権力の樹立＝二重権力の創出→武装蜂起ーの出発点＝開始であることを確認した。

しかしまた、われわれは、一〇ー一一月闘争が、新左翼諸派のこうした権力闘争の開始の無自覚の故に、反乱大衆の分散と無力化、反乱戦線の分解と崩壊ー学園占拠＝全共闘の解体、セクト化、高校生反乱の停滞、反戦派労働者への資本の処分攻撃ーをもたらしたことも確認している。☆

（2頁へ続く）

工場占拠ゼネスト
二重権力
武装蜂起

（再記）

伴　透

われわれは、先に「武装」二号の「工場占拠ゼネスト・二重権力・武装蜂起」と題する論文において現代革命戦略の基本的概要を明らかにした。そこでは、「階級国家の究極の形態をなし中央集権的強大性をもつた」「史上最強の階級国家」たる「ブルジョア国家を打倒」するためには、「ブルジョア武装権力に対する『プロレタリア武装権力』の構築が必要」であること、即ち、「権力による権力の打倒」を準備する過程としての「二重権力状態」の戦略的意義が確認され、同時に、プロレタリア権力は、生産過程を基礎にしなければならず、そのためには、現在開始されつつある工場占拠闘争を社民官僚との内部階級闘争と都市人民戦争による権力の無力性の暴露を通して如何に拡大・発展させうるかが死活問題として提起されていることが強調されている。

われわれは、以下の行論において、ロシア革命と一九六八年フランス五月革命の再度の総括をふまえつつ「権力による権力の打倒」という路線の歴史的普遍性を再確認し、併わせて現代革命戦略の基本的パターンの定式化の作業をさらに深化・緻密化させていくであろう。

一、二重権力の戦略的意義

レーニンの「国家と革命」の最大の欠陥は、国家論は、成程、展開されてはいるが、肝心の革命の問題が消えてなくなつているところにある。即ち、ブルジョア国家を中心とする国家一般の批判とその粉砕の不可欠性及びプロレタリア権力としてのコンミューン、ソビエトのイメージは、語られているが、その間をつなぐものは、「おきかえの論理」であり、一体何をもつて、即ち、如何なるプロレタリアートの組織をもつてブルジョア権力を打倒するのかというプロレタリア独裁樹立の過程＝いわゆる政治革命の問題への回答が欠けているのである。「国家と革命」という主題のうち、「革命」の方は、具体的には、何一つ語られてはいない。まさに看板にいつわりあり、である。

「おきかえの論理」とは、「プロレタリアートは、ブルジョア権力機構を粉砕したのち、直ちにプロレタリアートの権力を組織する」（国家と革命）ということ、即ち、「プロレタリア権力をもつてブルジョア権力におきかえる」（同）という論理を意味する。

この「おきかえの論理」とは別に、レーニンが「国家と革命」でその意味するところに気付かずに引用したオランダの革命家、パンネックは次のように述べている。「革命の内容は、プロレタリアートの権力手段による国家の権力手段の廃棄と排除である。（傍点筆者）」

まさしく、史上最強に組織された中央集権的ブルジョア国家機構を打倒し、粉砕するためには、それを上廻つて強固に組織されたプロレタリア権力の存在が不可欠なのであり、そうした認識は、ブルジョア権力打倒以前にプロレタリア権力が存在する「二重権力情況」を必然的に要求する。従つて、革命は、二重権力の止揚として問われるのである。

二、全権力をソビエトへ

四月テーゼ以降の諸論文でくり返し分析されている二重権力の問題が「国家と革命」で総括されていないのは、一〇月革命の勃発という事情のほかに、レーニンが二重権力を後進帝国主義国ロシアの特殊事情に解消して理解したことによる。即ち、二月革命以後、直ちにブルジョア権力は打倒さるべきであつたが、ロシアの後進性からプロレタリアートの革命的意識が未成熟であり、それ故にブルジョア権力の存続を許し、さらには、ソビエトがブルジョア権力＝臨時政府の補完物となつていること。

しかし、ソビエトの成立は、ブルジョア支配機構が麻ひし、ブルジョアジーが政治的にも経済的にも統治能力を喪失して引き起される全社会的な行政・生産過程の混乱に際

して「生産しなければ食えない」という労働者の即自的生産管理を基礎とする以上、ソビエト形成の過程の初期にあつては、労働者が権力奪取の必然性を認識しえないのはロシアに限らず普遍的な傾向なのである。即自的な労働者の生産管理に依拠したソビエトのヘゲモニーは、必然的に社民によつて握られる。

社民は、ブルジョア権力との対決の不可避性を認識しえないが故に、ブルジョア政府の補足物にソビエトを転落させるというような事態が生じる。これもまた必然である。だからこそ、四月テーゼ以降のレーニンの戦略は「ブルジョア政府への一切の協力拒否、全権力をソビエトへ」として、ソビエトの自立化＝プロレタリア権力としての強化、及びソビエトに依拠して存在していたブルジョア政府の弱体化の促進、さらには、ブルジョア政府とソビエトを取りもつことを党派性としていた社民からのヘゲモニー奪取＝ソビエトのボルシエビキ化による強化であつたのだ。強化されたソビエトをもつて弱体化したブルジョア権力を粉砕すること、これこそ、二重権力の革命的止揚であり、プロレタリア独裁樹立の内容に他ならなかつた。

三、ブルジョア支配の麻ひ

二重権力の一方をなすソビエトの成立は、ブルジョア支配の麻ひを不可欠な前提とする。確固としたブルジョア支配が存続する中で局地的なコンミューンなどは永続化しえないからである。特に解放前の中国などとは異つて中央集権的に権力機構が編成されている先進帝国主義国にあつては、ブルジョア支配の全国的な麻ひを前提としないソビエトは、完全に無力である。ロシア革命では、反戦闘争の勝利＝帝国主義ロシアの戦争遂行政策の破綻＝帝国主義軍隊の内部崩壊によつてブルジョア支配の危機が現出した。

一般に戦後革命においては、第一次大戦後のドイツの例のように敗戦による自国帝国主義軍隊の解体をもつて権力発動の保証を失つたブルジョア支配の麻ひが現われ、生産管理→ソビエトへの移行が比較的容易である。

けれども、戦後革命の圧殺を経て確立された戦後体制の崩壊期におけるブルジョア権力の無力化については、他帝国主義軍隊のゲバルトをあてにすることはできない。自国のプロレタリアートの力量をもつて勝ち取る以外にはないのである。相対的安定期の崩壊期における権力無力化を追求する闘争の形態をわれわれは、ゼネストに求めなければならない。これこそ、フランス五月革命の提起した巨大な教訓である。

四、ゼネストの戦略的意義

トロツキーは、「ゼネストは、如何なる改良的スローガンを掲げようと政治闘争である。何故なら、ブルジョアジーは、生産過程における支配の全国的喪失だけでなく、政治過程の支配をも喪失せざるをえないからである」（続フランスはどこへ行く）という画期的な指摘を行つている。闘つている人間の主観的意識の程度しか問題にしえない革マルの亜流にすぎない諸君には、こうした視点は絶対に理解しえないだろう。

ゼネストの意義は、一つには、ブルジョア支配の全国的麻ひを引き起すことであり、さらには、ゼネストという消極的であるとはいえ、ブルジョア支配の否定は、ブルジョアジーが「政治的・イデオロギー的支配の物質的基礎である生産手段」（ドイツ・イデオロギー）を支配しえないという事実をもとにそのさらに高次な否定↓生産管理・ソビエトへのプロレタリアートの意識変革を可能にする客観的根拠を創出するところにある。

従来の階級形成論は、プロレタリアートの意識をその存在基盤の変革とは無関係に「外部注入」というイデオロギー操作で変革しうると夢想する観念論的急進主義と、逆にプロレタリアートの自然発生的意識変革を唯物史観的に分析する機械的宿命主義

とう二極に分解していた。そして今や、プロレタリアートの自然発生性をもつてその存在基盤の変革＝対象変革を遂行させ、その対象変革を通して形成されたプロレタリアートの存在基盤の新たな水準を基礎にしたさらに高次な意識形成という真の唯物史観に基づく階級形成論の登場が要求されている。対象変革↓意識変革、それを媒介するものとしての党の指導という階級形成の原則を再確認しなければならない。

五、内部階級闘争

われわれのゼネスト論に対して「結局、フランスのように社民のヘゲモニーが貫徹するのではないか」という不安をもらす諸君がいる。そこでフランス五月革命をヘゲモニー論の視点から再度総括してみたい。

C・G・Tの指令したゼネストは、一般的な「議会制防衛＝体制防衛のゼネスト」（ブンド）ではなかつた。確かに、仏共産党は、以前から久しく、ド・ゴールを「議会制民主々義の否定者＝独裁者」として非難してきてはいたが五月一三日当時の情勢では彼ら自身の議会主義的行動論理のうちにゼネストを必然化する条件はなかつたのである。彼らにゼネストを強制したもの、それはフランス階級闘争

的行動論理に基づく対応といえば、むしろ、五・一三以前の「弾圧を招くから暴力はヤメに」という反トロ・キャンペーンと学生運動に対する敵対であつた。そうした対応自身が、カルチエ・ラタン闘争とそれに続く下部の自然発生的工場占拠闘争の高揚の波に取り残され、ヘゲモニーを回復するためにカンパニア一日ゼネストをかぶせようとしたのである。つまり、ゼネストを提起したこと自体、C・G・Tのヘゲモニー喪失の結果だつたといえるだろう。

しかも、二四時間のゼネストをかぶせただけでは、共産党のヘゲモニーは回復しえず、ゼネストは、指令をのりこえて長期化した。ある意味では、工場労働者に対するヘゲモニーの空白期間が続くのである。C・G・Tは、ストライキ実行委員会を指名によつて上から選定し、プロレタリア大衆を帰宅させ、工場から排除することによつてヘゲモニーの回復をねらつた。そこでも、まだ、ヘゲモニーは回復しえず、五・二六のブルンネル協定によるボス交収拾路線も大衆から相手にされなかつた。五・三〇のド・ゴールの五〇万軍隊によるどう喝におののいて、「他の組合は全部スト解除し、残つているのはことだけだ」というデマを全ての組合に流すことと、経営者まで加えた少数のC・G・T系組合員による投票によつてやつとゼネストの解体にこぎつけたのである。しかも周知のごとく、ルノーその他のゼネストを「占拠ゼネスト」として闘いぬいた拠点にあつては、権力の直接介入まで、ストライキは継続された事実を見落してはならない。

六、占拠ゼネスト

以上の分析をふまえた上での教訓は何か。それは、社民のカンパニアゼネストに対しては、「工場占拠ゼネスト」をもつてその実力闘争への転化を図ること、さらに占拠ゼネストを担う部隊としての行動委員会を上からの指名ではなく、下からの、闘う部隊の独裁を保証する闘争機関として組織することでなければならない。ゼネストを工場占拠ゼネストとして闘うこと、これこそ、ゼネストを生産管理・武装を通してソビエトにまで発展させるための第一の前提である。そしてその過程は、また、階級闘争のヘゲモニーを社民から奪取する過程に照応するだろう。

七、都市人民戦争と工場占拠闘争の相互媒介的発展を!!

それでは、現代革命戦略の環たるゼネストは、如何にして勝ち取られるのだろうか。その回答は、いたずらに社民のゼネスト提起を期待する行為のうちではなく、現在、開始されているところの職場・工場占拠闘争を如何に永続化

し、拡大するのか、という極めて実践的な課題に答える努力の中に求められなければならない。

そして、その回答は、職場・工場占拠闘争の永続化、拡大を妨げている最大の要因である国家の暴力装置の介入と社民官僚の抑圧粉砕を如何に遂行するのかという問題に帰着する。これまで行われてきた部分的、散発的占拠闘争は行動委員会の組織化を通して闘争主体を形成するという巨大な意義を有するが、それが部分的、散発的である以上、権力による各個撃破に対決することが困難であり、従つてその永続化、拡大もまた、難かしい。

孤立し、分散した布陣で密集した反革命＝機動隊を迎え打つことの不利は、地区労学共闘の形成によるわれわれの側の密集した相互突入闘争によつて、さらには、都市人民戦争として革命的左翼の全力量を投入して、人民のうづの中に機動隊を引きづり込み、分断し、孤立化した敵を各個撃破していく闘いの展開によつて克服可能となるだろう。

都市人民戦争＝街頭、地区制圧戦と学園、工場占拠闘争の相互媒介的発展こそ、現下の閉塞的情況を突破し、真の権力闘争の展開を可能にする唯一の路線である。

志村化工「突入闘争」

工場からの報告

中村礼二（志村労組）

去る一一月一三日、佐藤訪米に対する「新宿都市反乱闘争」を夜に控えて、「安保粉砕・工場占拠」「工場反乱」を呼びかけた志村化工への「工場突入闘争」が闘われた。

この日の昼、「突入闘争」に参加した労働者と学生は五〇名。志村化工志村工場正門から突入し、ヘルメット姿で工場内デモを開始。

デモ隊は「アンポフンサイ」「バンランショーリ」「カイコテツカイ」（反戦派労働者見崎君の解雇の事。『解雇撤回闘争』はスト権までたつたが、合化労連に属する組合執行部によつて流産させられた）のシュプレヒコールをくり返しながら食事中の労働者に数百枚のビラを配布して進んだ。

工場内への突如のヘルメット部隊の出現に驚いた会社は、志村警察に連絡をとる一方、全職制を正門前に結集させた。職制の一部と組合幹部（日共を中

八月、見崎さんの処分撤回闘争に組合が全面的に取り組むことを大会で決議したとき、民青系のある組合員（今、青婦部で副部長をしている）がこういうふうな発言をした。

「こういう闘争はどんどんエスカレートしていきます。そうした場合、見崎さんは組合の指示に従いますね。この点をはつきりしておかねばなりません。というのはこの志村の近くの藤倉化成という会社での闘争のときにはトロツキストがはいつてートロツキストというのは今、ヘルメットとゲバで暴れている暴力学生等のことをいいますー組合がメチヤクチヤになつて機動隊が導入されて、今では組合運動が全くできない状態になつてしまいました。見崎さん

は組合の指示に従いますね。この点を確認しておきたいと思います。ただこの処分は不当です。われわれは断乎として闘わなければなりません。」

彼の予言にもかかわらず、処分撤回闘争はエスカレートしなかつたし、それどころか闘争という闘争はほとんどなされなかつたわけだが、その彼が一一月一三日乱入したヘルメット部隊を見て何を考えたかは想像に難くない。実際突入行動の日、青婦部は緊急幹事会を開いて、おそらく意識的にであると思うがああいう行為（突入のこと）は許してはならないという決議を採択した。次の日、「トロツキストを許すな」というビラが職場に配られた。幹事会の中での意見としては、このようなものがあつた。すなわち、ああいう行為は組合民主々義を破壊する。右翼に利用される。暴力は許されてはならない。ともかくとんでもないことだ。しかしこのような圧倒的罵言の中で、なぜ彼らがそうしたのか学習活動をしなければという意見もあつたことは、特記しておかなければならないだろう。

とにかく青婦部の中では突入行動は不人気であつた。このことは志村の青婦部がいかに民青の影響が強いかを示している。青婦部部長は民青の者であり、組合書記長は日共の者である。委員長は社民だ。組合事務所には赤旗が毎日届けられて〝トロツキスト〟攻撃をヒステリックに訴え続

それでは一般組合員はどうであつたか。長年の抑圧に苦しんできた組合員はほとんど本能的に、乱入したヘルメットの一群に対し、自分たちの解放軍を想起した。ただこの解放軍は強くなかつた。職制と組合書記長にむらがつてなぐられ、八人もぶざまな格好で捕えられた。一瞬、光明のさした組合員の心にまたカゲリがもどつてしまつた。ただ組合員の中には職制と一緒になつてなぐつた書記長に対し強い批判がかなり広範に見られた。「何も職制と一緒になつてなぐる必要はないじやないか」。また食事のときなど「オレは何人なぐつた」などと自慢している会社の手先たちに対しても、周りの者はひんしゅくを呈することが多い。一般組合員の意見としては、①今日はゼンガクレンがハツパをかけてくれたから、一時金も一発回答がでた。②田中（書記長）は腹黒いヤツだ。大平（職制と一緒になつてなぐつた）は見るからに凶暴だ。③もう二、三回来たら一時金も満額出るだろう。④テレビで志村が従業員を一人不当解雇したから学生がその抗議に来たと放送していた。会社も悪いのだ。⑤こんどはあんなザコなんかよこさないで、東大なんかでやつてるすごいヤツ等をよこさないと面白くない。⑥たまにはハプニングでも起らないと退屈でしようがない。いい刺激だ。

一般組合員は青婦部とか活動家たちよりはヘタな先入観を受入れないだけの抑圧の苦しみをもつていた。ここでも心にした）はデモ隊におそいかかり暴行を加え、数名をラチした。

デモのかけ声とビラの配布によつてヘルメット部隊の工場突入を知つた一般組合員は、しかし、職制と組合幹部の暴行を必死になつてやめさせようとした一人の労働者を除き、沈黙して事態をながめていた。

志村警察がかけつけたときには、デモ隊は既に二回にわたつて工場内デモを完了していたが、正門前での職制の妨害に出会い混乱に陥り、職制と組合幹部にラチされたものの中何人かは、パトカーのサイレンが聞えるや「逃げろ」といつて放されたが、このとき八名が逮捕された。

「工場突入闘争」は失敗だつたのだろうか？　組合員の心の中には何の変化も起さなかつたのであろうか？

一三日の夕刊と一四日の朝刊において全てのブルジョア新聞と「赤旗」はこの「工場突入」を報道した。「サンケイ」と「赤旗」は就中、一面記事または多くのスペースをさいてこれを警戒的・批判的に伝えた。

上にブルジョアジーと日本共産党を震かんさせたのだ。

「学生のような闘い（「バリ・スト」「占拠闘争」）が工場にもちこまれたら大変だ」という気持が彼らのいつわらざる気持だつた。

「工場突入」「相互突入」の闘いは、「部分スト」「部分反乱」を「全面スト」「全面反乱」に波及させる歴史的な闘争形態である。つい先日の「フランス五月」にもそうした闘いをわれわれは見ることができる。

「反乱」は日本においては「学園」や「中小工場」で開始されている。学生や中小企業下部労働者の巨大なエネルギーは今や「工場占拠ゼネスト」に向けて発展させられねばならない。志村化工への「工場突入闘争」はその第一歩を切り開こうとしてなされたものであるが、ここからわれわれは多くの教訓を学び、さらなる「工場突入」「工場反乱」を目指した闘いに全力をあげねばならない。〝工場からの報告〟はそのための多くの教訓を与えてくれるであろう。

執行部と組合員との意識の開きを見せている。一般に事件を直接見た者よりも、間接的に見たり聞いたりした者の方が好意的であつた。（交替勤務のため突入を見なかつた者も多い）　それは暴力ざたになつた場合の傍観者の普遍的な反応だと考えられる。組合員の約半数は突入行動に対して好意的、あるいは寛容であつたと見ていい。

ただ、そういつた左派組合員たちもときの経過に従つて意識も変化していつた。二度目はたくさんだという部分が出て来るのが感じられた。しかし彼らはまた、会社が二度目の学生の乱入に備えて管理職が徹夜警戒したとか、守衛があの日からヘルメットをかぶつて巡りだしたとかの情報を耳にするとき、顔が生き生きする人たちでもあつた。見崎君の門前ビラ入れに対しても、会社は正門を閉じたり、何人もの守衛、職制を動員したりして妨害するが、こうしたきたならしい会社のやり方に、多くの組合員は不信を深くするのである。それに対し、青婦部の中心部分、右派組合員はどう変化していつたか。民青系の連中は組合役員、青婦部の圧倒的支持により驚くべき自信を示し、少数の反戦派に対し攻撃することをやめ、自分らの仲間に引き入れようとする態度を見せている。彼らは、「反戦派が労働戦線の先頭に立つて一緒に行動できるよう追求していかねばなりません」という言葉を使いだしたのだ。もちろん、反戦派はそれに従うつもりは毛頭ない。

権力側はどうであつたか・・・・。すべてのブルジョア新聞はこの事件を取りあつかい（サンケイ新聞は一面に載せた）、学生運動の労働者への波及を極度に恐れ用心しているのが感取できる。テレビでは労働運動史上初めての試みと報道され、ブルジョアジーに大きな衝撃を与えたことは間違いないようだ。全共闘運動の労働戦線への波及をいかに押えるかは日経連の一つの方針でもあつた。わが志村化工も警報機を直すとか、出入口を固めるとか（今まではルーズであつた。）守衛がヘルメットをかぶつてひんぱんに巡回し出すし、二度目（彼らは仕返しと言つている）を恐れている。この前、FLと反帝学評が王子で「野戦病院半分撤回抗議」デモをやつたときも、学生三〇〇人位が王子から志村へ向つているというイタズラ電話がかかり、管理職が八時半まで待期するということがあつた。それにしてもイタズラ電話がひんぱんにかかつてきて、管理職は相当消耗しているようだ。

最後に、われわれ志村の反戦派労働者のこの突入行動に対する総括と今後の方針について書いておきたいと思う。われわれはこの突入行動は今でも支持しているし、正しかつたと考えている。ただ戦術的に「不当処分撤回」「一時金支援」をもつと明確に打ち出す必要があつたのではないか。その戦略として安保粉砕、職場反乱を持ち出すべきではなかつたか、を反省点としている。それになによりも決

定的なことは外部からの働きかけに対し、内部での応答をするには、反戦派は組織的にも理論的にもあまりにも未成熟であつたことである。この突入行動は一般組合員に対してよりもわれわれ反戦派の者に対し、混乱か秩序かの決着を迫つたことを白状しなければならない。だからこそ青婦部の緊急幹事会において、反戦派の者は動揺してしまつて十分返答ができなかつたのだ。われわれは単に反民青に過ぎなかつたことを十分に反省し、今後資本主義社会の危機において民青にかわるべき勢力として階級闘争の主体にのし上るべく理論的にも組織的にも準備しなければならないことを痛感する。民青の連中の歴史に対する見方の甘さ、人間に対する見方の甘さ（歌とおどりで革命の成就を考えている）が革命の主体であるはずがない。この点は理解していたのだ。進行する資本主義社会の危機、それに打ち勝つには二重権力でもつて応えていかなくてはならないこと—「学園占拠という形で始まつた全共闘運動を、労働者の中に作りだし、「職場占拠」「工場占拠」を実現せねばならぬこと—を理解していなかつた。それと自分の中のブルジョア意識を一掃することができずにいたのだつた。これらの点を反省し、さらに前進することを同志諸君に約束する。

全逓戦線における安保粉砕労働者行動委の斗い

安保粉砕職場占拠ゼネストをめざして

青年共産同盟全逓大崎支部

はじめに

七〇年安保を控えて「全逓信労働組合」の組合官僚は、六八年一〇月をもつて文字通り闘う労働者人民に対して攻撃を開始した。

労使一体化路線をもつて、七〇年闘争の延命を図つている民同にとつて、こうしたわれわれに対する攻撃は必然的なものであると言えるだろう。

では何故にこうした攻撃があるのか。さらにわれわれは、いかなる闘いを展開したのか。

これを見るためにわれわれは六七年年末闘争の総括を再度見い出す必要があるだろう。そしてそこから新たな職場生産点闘争の発展性が発生する。

六七年の日本労働者人民の階級闘争は、砂川闘争を契機にして羽田ー王子へと大衆的実力闘争の突破口を切り開いた年であつた。そして、反戦青年委員会〔以下反戦と略〕のこうした新たな闘争への参加によつて、七〇年代階級闘争の展望が切り開かれてきた。当然、こうした反戦の街頭における闘いは、職場・生産点へと還元されていつた。と同時に日本政府ブルジョアジーが、日本労働者人民に対しその収奪政策と管理支配体制を着々とおし進めている中で少くとも労働者大衆の不満は蓄積されていつた。

こうした中において、ドル・ポンド帝国主義通貨体制の危機が深まつた。まさに、内的・外的要因をもつて、全逓戦線ー大崎において年末闘争が展開されようとしていた。

ところで民同最右翼と称される全逓本部は、目的意識的に政治的闘争を追求するのではなく、単なる幹部内取り引き闘争を展開していた。だが下部労働者はその時すでに突然の物留闘争を展開していたのだ。

即ち、文字通りの大衆的反乱闘争への傾向を顕在化させていたのだ。こうした中において彼ら組合官僚共は、自らの官僚地位を恐れ、さらには、組合自体の破壊を恐れ、闘争終結に戦術転換し、その妥結内容も不十分なものとしてダウンしてしまつたのである。しかもハレンチにも闘つている労働者にどう喝を加えてまでも終結を急いだのである。まさに、全逓の反革命的・反階級的労働運動を顕著に示した年末闘争であつたと言わざるをえないだろう。

では、われわれの方向性と総括はどうであつたのか、われわれはこうした画期的年末闘争のその前面部隊として登場し、その反乱闘争をおし進めていつた。

そしてこの闘争の中において目的意識的に日本政府ブルジョアジーとそれと同体となつているところの郵政当局の合理化攻撃の粉砕への発展へとおし進めることを問われていた。

以下主要な闘争に則してこれをみよう。

一、六七年年末闘争

ー例年と同じ方針プラス業命拒否。全国で二千万通の物留予定。わずか四日間で物留数四千万通。ー

民同の物取り妥協闘争と省当局の日常的抑圧に不満を持ちつつ闘争に起ち上れなかつた下部労働者が何故四日間で電撃物留を勝ち取つたか。以下その主要因をみてみよう。

(1) 砂川ー羽田闘争が、学生・人民大衆の手によつて革命的に闘われた。その結果、議会での与野党の対立、院内闘争の形がい化、議会の占める位置が相対的に低下し、ともに社共の闘いの有効性も低下し、従つて、諸闘争の指導性の限界が顕在化、それによつて人民大衆の流動化全逓労働者においても、この闘いが浸透して還元されたこと。

(2) 業命拒否という新たな戦術を打ち出したことによつて処分の不安が解消したこと。

(3) 省当局の露骨な攻撃、民同の物取り妥協闘争に対する不満。

これらの諸要素が加味された結果、下部労働者大衆の主体的な闘いが、一挙に爆発したといえるだろう。

この闘いは、省当局を震かんせしめたばかりでなく、全逓民同もまたそれ以上の恐れをいだいた。それ故民同は当局とのボス交によつて、五日の午後四時現在妥協をもつて闘争を回収し、まさにこれをカンパニア闘争として終結させ、自らの社会的地位の安泰を守るために狂奔したのである。

だが何故、こうまで主体的に闘つた下部労働者が、民同の妥協に甘んじたか。それは

(1) 不満を持ちながらも、年賀郵便という特殊な業務があつたこと。

(2) 二重の敵権力の前に、個人的に分散されたこと。にもとめられよう。

しかしこの後退は、年末ー正月にかけての一時的なものであり、完全に闘いを忘れたということではない。何故ならば、一月一三日の大量処分に再び下部労働者の主体的闘いが爆発したからである。

◎ 問われていたのは何か。対応はどうであつたか。

こうした客観情勢を確認するならば、われわれに問われたのは、われわれの組織された独自部隊をもつて闘いを保障することであつた。下部大衆が、処分によつて、恐れを感じて闘争に起ち上れないとすれば、われわれの組織された独自部隊でもつて、権力を失遂させることであつた。それは同時に、民同の官僚的弾圧も粉砕することに通ずることであつた。そして、体制内取り引き闘争にあきたらないでいた下部大衆に依拠した職場反乱闘争へと転化することがするどく問われていたのだ。

しかし、われわれは残念にも行動部隊としては登場しえたが、主体的に闘争を位置づける力量が不足していたので、明確な展望のもとに、行動部隊を位置づけることなく、分散的に闘いを進めてきたのだ。それによつて民同の官僚的弾圧に屈服していつたのである。

ここで、われわれは以下の点を確認しておこう。

(1) 幹部闘争の終えんしたこと。

(2) 従つて、下部大衆が自らの闘いの主役にのし上つたこと。即ち萌芽的にあるにしろ、職場反乱闘争が現出したこと。

二、一・一三不当処分白紙撤回闘争

六八年一月一三日、郵政省当局は、年末闘争において、下部労働者の階級意識に目ざめ初めた闘いに恐れをなし、闘いに参加した者に対して無差別の大量処分を発令してきた。しかし、このような不当処分は文字通りのデタラメな処分であつた。それは管理者が業命の乱発をし過ぎたため誰に業命を出したか忘れ、業命を受けない者、病気で休んでいた者が業命拒否の処分を受けるという全くおそまつなものであつた。

こうした省当局のデタラメな処分を背景にして、処分白紙撤回闘争は、日を追うごとに盛り上り拡大発展していつたのである。

一三日、抗議集会を初めとして連日に渡る職場集会、課長交渉、局長交渉と日毎に大衆的基盤でもつてエスカレートしていつたのである。

ここで、この闘いがいかに拡大発展していつたのか、その過程をふり返つてみよう。

一月一三日
処分発令される
全体集会
分会集会〔集配課〕
早朝集会ー早朝ビラ入れ（毎日）

一月一七日
職場集会後課長（集配）に対し集団交渉〔青年部主体〕
課長不在のため副課長を中心に交渉。約二時間（四ー六時まで）。入口が狭いためイスのバリケードや組合員によつて入口を封鎖し自己批判を追求（謝罪文を作成）

一七日以降、下部の盛り上りによつて、支部執行部は、闘争に追いついていけずついに消火に回る。以降、青年部独自行動を追求。

集会がある毎に庁内デモを追求しつつ、局長交渉へ・・・。それを貫徹することによつて支部全体の運動を形成。

庁内デモは、これが初めてであつたため、恥しがつてダラダラ気分。当初、戦闘部隊一〇人位で追求し連日回を重ねる毎に、また先頭部隊を突出部隊で保障することによつて、各分会をまき込み、支部全体の庁内デモへと発展した。

その過程に課長交渉から局長交渉へと発展、さらに、局長室入口付近に労務担当をはじめ各課長でもつてバリケードを張りめぐり阻止線を張つたところ、下部組合員は、それをも突破し、局長室に乱入し、局長に対して追求する一方、マイクでもつて集会を勝ち取つた。そして、闘争の炎は、さらに南部地域へと転化し燃え広がつていつた。

それが二月一三日、南部全体の運動として初めて、「一・一三不当処分白紙撤回南部決起集会」へと発展していつた闘争であつた。

当初この集会はブロック会議で設定されたものであつた。ブロック会議では、四階会議室（大崎）で各支部五分間位の決意表明を行い、一階の伝送発着場で解散ということであつた。（民同ペースであくまでも追求しようとした）

当日、事前にブロック議長と話し合い、われわれのヘゲモニーのもとに開く結果となる。（結集率約一五〇名）

◎ 集会内容

各支部の決意表明→庁内デモ→一階伝送発着場で集会（ここで地本役員が解散命令出す）、即座に大衆討議にかける。そして四階に再びもどつて討論集会を追求する等々を圧倒的多数でもつて決定→討論集会（以降民同の圧力は、直接われわれにではなく、支部執行部を通じてかけてきた。しかし、大衆の圧倒的な盛り上りによつて押さえようがなかつた）

こうして、地本の圧力にも屈せず階級的に集会を勝ち取つたことによつて、さらに全都へ広がつていつた。

しかし、地本のどう喝は執ようであつた。それまでは支部執行部を通じてかけてきた。執行部の統制力がないため、地本役員自らのり出し、個人名でもつて攻撃を加えてきた。この攻撃に対してわれわれは、またしても屈服してしまつたのである。そしてそこからわれわれは、次のような総括を行つた。

(1) 少人数（突出部隊）で保障することによつて全体的な闘争へと発展すること。

(2) また、庁内デモ・局長室乱入という闘いも慣例化することによつて追求できること。（権力の失遂）

(3) 要求カンパニア闘争が、闘争の過程において、カンパニア闘争の枠をはるかにのりこえること。つまり、頭の中では要求闘争を追求しているが、行動面は職場反乱闘争へと発展していること。

(4) 既成指導部が提起した問題を逆手にとつてまだ闘えること。

(5) 萌芽的にしろ反乱闘争へと発展した闘いによつて、今日まで民同型労働運動の枠の中に押しこめられていた運動が、下部末端から崩壊しはじめたこと。

従つて、ここに問われていたものは、民同指導下に存在している組織とは別個の組織、つまり、行動委・闘争委の形成である。それが目的意識的に追求されえなかつたことによつて体制に押し流され、単発的に終つてしまつたのである。

だがこの時点では、まだ民同の攻撃に対して、分散的であつても多少たちうちはできた。また、ある一定の運動を形成することはできたといえるだろう。

こうした一連の不当処分白紙撤回闘争は、民同型労働運動の枠の中に終息されていつた。

当然、六八年春闘も志気があがらないまま、民同ペースで追求された。

三、七・一〇処分

七月一〇日、二名の者に処分が発令された。この処分撤回闘争に向けての戦術をめぐり、大崎の戦闘的労働者の戦線は、事実上明確に二つに分裂していつた。つまり民同の補完物となり下つた「反戦派」とわれわれとに。

彼ら「反戦派」は現在、民同の力はまだまだ強く、またこの処分は活動家を放逐する挑発行為なのであるから、独自に組織体を組んで闘いを展開してもみじめな敗北しかもたらさない。従つて、現在、われわれが主要な任務としなければならないのは、支部権力を握ることである・・・云々。

われわれは、処分が発令された直後、直ちに現場に飛びこの不当な処分に対し、抗議行動を提起した。この時の組

合員の意識状況は、一・一三においての大量処分が脳裏をかすめたことは疑いのない事実であつた。ということはわれわれの方針提起の時点においてかなりの賛同者がいたからである。こうした事実を、彼ら「反戦派」は、見抜く事ができず、たえず孤立しているという観念が強く働き、一時的に民同と歩調をあわせていくべきだ・・・。つまり民同のいう〃この処分は組織分裂をねらう挑発的処分だから、組織体制を確立してから闘争を組む・・・。〃と同じ論議でわれわれに対抗してきたのである。

おりからの青年部総会の議案書をめぐつて、支部執行部常任委員の一部は、われわれに対しむき出しの攻撃をかけてきた。また、民同もここで明確に統制処分をめざして攻撃をかけてきた。この攻撃にわれわれ少数派は、民同およびそれと一体となつた「反戦派」とのし烈な党派闘争を展開する一方、弾圧粉砕行動委員会準備委員会を結成し、パンフ第一、第二と発行して、不満分子中心に個人オルグを追求した。これに対し、観念左翼と化した「反戦派」は、民同に幻想をもち、支部権力を握ることに相も変らず狂奔し、われわれに敵対意識を露骨に打ち出してきた。

いわゆる彼ら「反戦派」は、反弾圧行動委を、単なる反民同としか理解できえず、不十分であつた行動委そのものによりかかることを出なかつた。

もちろんこの時点で行動委を公然化したならば、民同の思うつぼにはまるだろう。左翼であるならば、このような分析はイロハのイではないだろうか。

このように即時性にとどまり、また、観念的に現状分析をする彼ら「反戦派」は、民同型労働運動の枠をまだまだ脱皮していないのだ。何故ならば、彼ら「反戦派」は、組合の取り引き闘争を最大必要としなければ、自己の組合的地位を保持することができないからである。さらには、反乱闘争へ向けての戦術を自ら打ち出すことができないという弱さもある。それゆえに彼らは、現官僚的民同労働運動における補完物となつている。民同にしてみれば、最大の敵を包摂したことになるであろう。

彼ら「反戦派」は、こうして今や、完全に民同と一体となつて、われわれの方向性に対して、反左翼的に介入してきている。こうした民同の補完物となり下つた彼ら「反戦派」は、職場の中において、自ら独自方針を打ち出すことができず、ただひたすら民同の提起を待つている。また、こうした事実は地域においては、彼らがかかげる反戦青年委〔品川地区〕が社青同解放派の相も変らぬ社民ズブズブの方針との連帯のもとに行動部隊の完全な喪失、理念だけで追求する観念左翼にダラクすることを必然化している。

しかしわれわれは、こうした彼らとのし烈な党派闘争を展開する中で、われわれ独自の主体的な組織活動を「反弾圧行動委のパンフ」のもとに、民同の官僚的弾圧・既成指

導部の無力化を徹底的に暴露するとともに、省当局のむき出しの攻撃に対決すべくわれわれの行動方針を中心に、連日にわたつて個人オルグを展開した。

しかしこのオルグ活動は、体系的に行わなかつたために途中で坐折せざるをえなかつた。

これを総括すれば、われわれの運動が次のような弱点をもつているといえる。すなわち、

理論的に追求されていなかつたこと。

部分的であつたこと。

分散的であつたこと。

一時的な心情に依拠したこと。

体制内的心情に大分部が依拠していたこと。

こうした総括のもとに、われわれは、新たに組織活動を開始していつた。「こうして現在の行動委が確立していつたのである。」

まず、戦闘的不満分子を中心に職場反乱闘争を担う実力部隊、すなわち行動委として確立するため理論学習を徹底的に開始した。

われわれは、この学習会を単なる理論研究の機関とすることなしに、地域行動委確立に向け六月一二日、品川労政会館において、品川地区安保粉砕労働者行動委員会準備委員会の名の下に、安保粉砕労学講演集会を主催し、結成宣言をもつて、品川地区における安保粉砕労働者行動委員会を結成した。そして七〇年闘争のカギともいうべき「新宿」闘争に「地区バリ占拠ー都市反乱ー職場反乱バリスト占拠」をもつてのぞみ、目的意識性をもつて、全員闘争に参加していつた。

×六・二八新宿反合闘争は、六・二八総括集参照

四、われわれの教訓

六五年、日韓闘争以降、それまで社共・民同既成指導部に掌握されていた日本労働運動は、ベトナム反戦、一連の基地闘争を背景として大きな転換をもたらした。

それは、下部労働者・人民が、既成指導部に依存することなく、自ら行動し、運動体を形成してきたことの結果である。「六七年砂川闘争ー羽田闘争ーエンター阻止闘争ー王子闘争ー成田闘争ー米タン輸送阻止闘争」

こうした連続的な基地闘争が、学生・労働者大衆人民の非和解的実力闘争で闘われた結果、社共・民同の有効性が低下するとともに、下部労働者大衆の流動性が開始されたのである。さらにわれわれ労働者の方向性を明確に位置づけた闘いを見のがすことはできない。

下部労働者が公然と、既成指導部と政府ブルジョアジーに対し、反逆ののろしを上げた闘いであること。それは職場占拠・職場反乱行動という萌芽的形態からも表現されている。

今日、資本主義国が高度に発達している現在、労働者権力を樹立する闘いは、こうした萌芽的に現出した職場反乱・占拠を目的意識的に追求することなしに、現在の強固な国家権力、政府ブルジョアジーを放逐することはできないだろう。すなわち、全国津々浦々に散在している無数の革命的労働者が、政府ブルジョアジーの生命源であるところの生産過程において一斉に反乱闘争に突入することである。

とりわけわれわれ全逓大崎において、一昨年の年末闘争、そして一・一三不当処分撤回闘争を戦闘的に闘う中で確認できることは、一連の基地闘争、ベトナム反戦闘争が、われわれの闘いによつて媒介され、職場末端組合員に大きく還元され、それによつて、今日まで、民同型労働運動の枠の中に押しこめられていた下部組合員の蓄積された不満が誘発され、爆発したことである。それと同時に、民同の体制内への逃亡と、それと不可分のわれわれに対しての当局と一体となつた官僚的弾圧に注目しなければならない。そして組合主義左派（反戦派）もまた、民同の枠の中に逃亡を開始し、やはり同じくわれわれに対して、右翼的介入を行い、自己の組合的地位を保持せんがため、民同の先兵となり下り民同への忠誠を余儀なくされている。

ベトナム反戦、一連の基地闘争が学園の中に引き継がれ日大・東大を中心として全国に全学バリケード封鎖という形態をもつて怒とうのごとく波及し、また、学園ばかりではなく、職場に還元された今日、こうした質をもつた闘いは中小企業において職場占拠闘争として、大単産では、部分占拠・職場末端からの反乱という形態をとつて、さらに拡大発展がはかられている。こうした情況の中において、既成指導部との対決は決定的である。つまり内部階級闘争を貫徹しないかぎり、われわれの目的は一歩たりとも前進しないことを、全左翼・全労働者は確認しなければならないだろう。

民同＝体制内秩序派は、戦闘的労働者に対し、官僚的弾圧・統制処分というどう喝とトロキスト攻撃・破壊分子等々の誹謗をもつてのぞみ、その大衆からの孤立化をはかつている。

われわれは、こうした一連の攻撃を真正面からうけて、明確に民同から決別し、新たな組織体でもつて対応しなければならない。もはや、今日のように激動の真中において組合内部での突き上げや支部執行機関を握るというようなことにとどまつては、闘いを継続することが不可能になつてきているのだ。今日、民同と明確に対置できる唯一の組織体、また、下部大衆の闘争を保障できる組織体は、大衆の闘争委・行動委を除いてはありえない。先進的左翼は、早急に職場大衆行動委を構築し、反乱部隊の担い手とせよ。そして、大衆行動委の中に実力防衛隊を組織し、南部ー全

都ー全国へと拡大発展させよ。

われわれは以上のような教訓をふまえ、権力がしかけた安保「一〇ー一一月決戦」に対し、これを革命的に闘いぬくことを目指し、そしてここに七〇年闘争への展望を主体的に構築することを目指し、全力をあげてとり組んだ。

一方で強化される政府＝資本の合理化攻撃の典型ともいうべき高輪局労働者の自然発生的山ネコストが勃発するや、ただちに支部へのビラ入れをもつてこれを隠蔽しようとする組合官僚の陰謀を暴露し、戦線の拡大をはかつた。

そしてこうした闘争を通して、一〇月二〇日昼には、安保粉砕・合理化粉砕の戦闘的庁内行動を貫徹した。さらに一一・一〇全逓南部反戦派労働者集会を勝ち取り、一一・一二、一三と連続集会デモを貫徹、その闘争委のもとについに独自の結集力を実現しえたのである。

五、省当局の当面の攻撃とわれわれの任務

省当局は、政府ブルジョアジーと一体となり、七〇年安保封じ込め政策の一環として、郵政五ケ年合理化の総仕上げにのり出してきた。

当局は九州をはじめとする北海道、大阪、東京と連続的に、国家権力＝機動隊の導入のもとに、強行的に自動読み取り区分機（最終的合理化）を搬入してきた。

また、職場生産点においても、事業愛を植えつけ、従順なる番犬をし育する攻撃が徹底してきている。青年層においては、思想訓練の一環としての青年訓練（期間一週間）雑誌「若い郵政」等々。

中間層においても斑長制度が導入されて以降、斑長をはじめとする主任、課長代理を中心に、「中間管理者」という名称を使い、あたかも自分は管理者だという意識をもたせ、管理体制の再分割を軌道にのせようと徹底教育を強要してきている。

こうした省当局の露骨な攻撃に対して「中間管理者」は、抵抗、反撃するのではなく、鼻の先につりさげられたニンジンを無心に追いかけ、青年層に対し、露骨に攻撃を加えてきている。

こうして郵政五ケ年合理化の達成、管理体制の再分割、協定・協約の拡大解釈による不当労働行為、職場秩序の徹底維持、監視労働の強化、特例休息のはく奪等々にみられるように、彼ら省当局は、もはや労使一体化路線なるものを自ら放棄し、強権体制を構築しつつある。

彼ら省当局は、政府ブルジョアジーと一体となつて、下部労働者のしめつけ・収奪等々の攻撃をさらに深化させ、全逓官僚と共にどう喝を加え、労使一体（経済闘争ではなく、下部組合員に対するどう喝）となり、七〇年闘争を官

僚支配体制に包摂することを目指しての全面攻撃を加えているのだ。

こうした政府＝資本の攻撃に対し、いうまでもなく全逓民同は闘争を放棄し、そして左翼労働戦線もまた未だ十分な反撃の体制を整えているとはいえない。

こうした条件のもとにあつて、われわれが六七年末以降一貫して追求してきた道は、今や重大な段階に至つている。すなわち、都市人民戦争という先進国革命を展望しながら、街頭を中心とする都市反乱と呼応しての工場・職場のストライキ・工場占拠を目指し、われわれは安保粉砕・合理化粉砕の行動委員会を形成してきた。今やわれわれに問われているのは、すでに確認したように、これを南部全域に、さらには首都、全国へと拡大した結合体へと発展させること、こうした部隊をもつて七〇年代の闘争の主翼として登場することである。

それは、われわれとともに全都・全国でこうした戦線を築いてきた部隊との緊密な連帯によつて、また特殊に全逓労働戦線の結集によつて実現されなければならない。

われわれは今春闘において、四ー五月の安保自動延長阻止の闘いにおいて、断乎たる決意をもつて、反戦戦線を拡大・深化させるだろう。

神奈川救援闘争委員会結成宣言

神奈川県下の革命的労働者・学生諸君!!

一〇・二一新宿闘争をもつて実質的に始まつた七〇年安保階級闘争は、佐藤訪米阻止闘争を目前にひかえて、これまでにない緊張した階級対立を迎えている。こうした階級情勢の中で救援活動もまた必然的に変革を迫られており、旧来の「逮捕者が出なければ機能しない。」活動が歴史的に止揚されようとしている。それではこれまでの活動ではどこが限界なのか。そして、新たな救援組織とはどんなものなのか。

まずはじめに、これまでの救援活動の意義とその限界をのべてみる。

旧来の救援活動は主として、国家権力による不当逮捕者の差入れ活動であり、釈放を求めるための法廷闘争であつた。即ち、活動家の不当逮捕、不当弾圧に対する抗議及び保釈請求であつた。この事は次の点に総括される。

第一に、救援活動があくまでブルジョア民主々義のレベルに依拠した抗議活動であり圧力活動であつた。

第二に、政治活動を先進的に担う部分を背後から援護するための活動であつたから、不可避的に権力闘争に従属されがちであつた。

第三に、六〇年代前半型の実力カンパニア闘争に見合つた活動、即ち、先進的活動家の密集した体型によるデモンストレーション用の活動であつた。このことは、救援組織の人間がデモの隊列を外側から見守つていさえすればよい時代の活動スタイルであつたことを意味する。

そして、最後にこれらの点が、「旧来の救援活動では逮捕者や負傷者がでなければ動き出すことができない限界」としてあつた。と言うことだ。

革命的同志諸君！

それでは現在問われている救援組織とはどんなものか。

現在の階級情勢においては、ブルジョア民主々義体制に依拠した闘いは一切組めない。なぜなら、戦後支配階級が人民に妥協的に与えたのがこの「民主々義」なら、彼らが自らの延命の途上に破壊し去つたのもこのカッコ付の「民主々義」だつたからだ。と同時に階級闘争がこのブルジョア民主々義に乗つかつた圧力活動から実力闘争へと、即ち、裸の階級対立へと露骨になつてきているからである。そしてこのことは何より「全共闘」運動がわれわれに教えている。あるいは東大闘争における裁判が良い例だ。「暴徒学生」は退席させられたまま裁判を受ける。被告のいないところで審議が進行している。文字通り階級裁判なのだ。

これればかりではない。

現在の階級闘争は敵階級の攻撃が先進的活動家に限らず、全人民にかけられてきている。例えば救援組織に対する弾圧もひん繁に起つている。闘争現場において救援活動を行つている者が逮捕されるという事実も少なくない。これは次のことを意味している。即ち、先に述べた先進的活動家の保釈請求という活動では、何ら機能しえないということだ。救援組織の主要な任務は、従つて不当逮捕者の現場における実力奪還闘争でなければならない。

国家権力による全人民抑圧攻撃に対して、全人民が闘いの担い手であり、自己防衛者である時代には、救援活動もまた権力闘争にならざるをえない。それが救援闘争の「闘争」たるゆえんなのだ。

それ故に、われわれは新たな救援組織を作ることをここに宣言する。そしてそれを「救援闘争委員会」と名づける。この救援闘争委員会は、「逮捕者を助け出す」といつた活動ではない。自らが帝国主義権力に反撃し攻撃する大衆組織である。それも、工場・職場・学園・地域を問わない広範な大衆組織である。

以上の点をふまえてわが救闘委の任務は次の諸点に設定される。

(1) 帝国主義支配階級の人民抑圧攻撃に対する徹底的暴露と反撃のための宣伝・煽動。

(2) 不当逮捕者の実力奪還闘争と直接救護活動。

(3) 闘争現場での情報の収集と報告。

(4) 革命的法廷闘争

(5) 同志に対する完・黙を主眼とした房内闘争の意識化。

(6) 組織の拡大強化と資金調達。

(7) 情況分析と意識高揚のための学習活動。

スローガン

安保粉砕!!

人民抑圧攻撃粉砕!!

階級裁判弾がい!!

全ての革命的労働者・学生諸君!!

神奈川救援闘争委員会（救闘委）に結集せよ!!

（18頁から続く）

☆しかも、セクト諸派は、七〇年代の安保階級闘争を、一〇―一一月闘争の中でその運動＝反政府街頭実力カンパニア闘争＝戦闘的組合運動・戦闘的自治会運動としての体制内的急進行動の破産が宣言されたにもかかわらず、〔三里塚決戦〕と叫び全国全共闘・反戦派労働者と呼ばれる戦闘的労働者を街頭カンパニアに引きもどそうとしているのである。

われわれは、そうした新左翼諸派とは決別し、自らをソビエト権力樹立の目的意識性で武装し、反乱組織として全共闘の再編と工場・職場内のソビエト運動を追求していかなければならない。

そうしたわれわれの第一歩は、全共闘の下からの再編であり、全国全共闘の再編である。そしてそれは、帝国主義の様々な攻撃を、ブルジョア学園秩序に対する不断の反乱行動―例えば、拠点占拠と学園の流動的制圧、教室突入闘争、日共＝民青を先頭とするブルジョア秩序派との内部反乱＝内部階級闘争の展開等―を通して各大学全共闘を再編することであり、その地域共闘から出発する以外ありえない。

第二に、職場反乱、工場突入、工場占拠闘争の推進であり、しかも自然発生的に中小企業労働者による工場突入・占拠闘争が、散発的、ゲリラ的に闘われており、さらに大阪中電の職場反乱を突破口に、政府・民間の大企業に波及し始めている。しかも、先にふれたように、大企業の職場反乱闘争は、職場内部の大衆的行動委員会の形成と、それを主軸とする、社民・日共組合官僚との内部反乱＝内部階級闘争が不可欠なのである。

第三に、こうした工場・職場の反乱行動委員会と全共闘による〝労学地区共闘〟の実現であり、しかも労働者戦線の反乱が端緒であるが故に、〔労学共闘〕を通して、学園反乱大衆の工場突入闘争が必須条件なのである。しかも、この〔労学反乱共闘〕が成長して、ソビエト運動としての真の反乱戦線が構築されるのである。

第四に、労学反乱共闘を基礎として、都市反乱・人民戦争を貫徹すること。何故ならば、工場・学園の反乱の拡大は、反乱の障害物であるブルジョア国家権力＝機動隊の無力性の暴露なしには、勝ち取れないからであり、しかもそうした反乱大衆の密集した力による機動隊―法と秩序の番犬―の治安弾圧体制の分断・麻ひ。それを通しての駅占拠・交通線分断、ブルジョア秩序の麻ひは、工場占拠反乱の蜂火に他ならないからである。

武　装　3号
発　行　青年共産同盟
連　絡　前衛社 264-5079
定　価　150円